

乳 (new) ～新たな酪農をめざして～

熊本県立農業大学校
畜産学科 2年 小島 太一

1 酪農家を夢見て

「俺は、将来酪農をやるぞ!」そう思い始めたのは高校2年生の夏でした。

中学時代の私は、特別に人生の目標もなく『動物が好き』という単純な理由で農業高校の畜産科に進学しました。農業や畜産に特別に興味を持っていたわけではなく、具体的な将来の展望があったわけでもありません。

入学してすぐに、牛舎をはじめとした学校の畜産施設を見学する機会があり、田舎特有の香りがなんだか心地よかったことを覚えています。そこでは、牛や豚、鶏、鹿といった動物に囲まれ、ここで今から農業を学んでいくのか…と期待と不安の入り混じった心持ちでした。1週間交代で当番実習があり、朝は授業の始まる前、夕方は学校の授業が終わってから牛・豚・鶏の各部門に分かれ実習を行います。

1年生の夏休み、当番で学校に残っていました。時間があつたので牛舎を見回っていたら、Y先生から、「プロジェクトで人手が必要だから手伝ってくれ」と言われました。そのとき行ったのは、牛の体温と呼吸数の調査だったのですが、作業の後、突然何の脈絡も無く先生から「家畜審査にでてみないか?」と言われたのです。この時点では私もまだそのようなものに積極的に参加したいとは特に思っていなかったのですが、特に断る理由も見当たらず、(家畜審査とはなんだろう?)と不安に思いながら引き受けました。それから、その家畜審査に向けた、先生や先輩方との勉強会が始まりました。勉強会では、単なる座学だけで終わることはなく、いろんな農家さんを見て周り、日々多くの牛を見る機会にも恵まれました。こんなにたくさんの農家さんを回れるのは、「先輩が共進会で糞取り作業に頑張ったからだぞ!」と言われましたが、共進会って何なのかイメージがわかりませんでした。県立農大で実施された、家畜審査競技大会。先輩方は夏休みの特訓の甲斐あって入賞しましたが、私は、一步届きませんでした。

家畜審査が終わるとすぐに熊本乳牛農協管内の共進会の準備が始まりました。牛の洗いか、引き方、毛刈り、調教の方法、etc. 多くのことを先生方や農家の方々に教えていただきました。そのなかでも一番苦労したのは、牛の引き方です。頭を上げて歩かせるのはとても大変なポイントで、なかなかスムーズには歩いてくれませんでした。

共進会当日、朝早くから準備し、最終的な調整を行いました。会場へ着くと、農家さんが牛を持ってきていました。牛をトラックからおろし、汚れたところだけ洗いました。エサを食べさせ落ち着かせます。背中ラインを綺麗に立たせ、準備が完了します。審査が始まると同時に緊張してきました。最初は牛を見る余裕が無く、農家さんの引き方を良く見て、どこをどう歩けばいいのかを見ていました。正直、牛を見るのは自信があつたのですが、歩いている牛を見ると

とても難しいことだと分かりました。私の番が来るとガチガチになり牛もあんまり歩いてくれず、審査員をみる余裕もなくなりました。順位は良くなかったですが初めて出場し、牛とのコミュニケーションが大事なのだと気づかされました。先輩の引いた牛が入賞し、4年に1度の「畜産まつり」への出品が決まりました。とても大変だったけれど、共進会ってこんなに面白いのかと実感しました。思えばこの頃から漠然と酪農を将来の職業にすることを意識していたように思います。共進会が終わった後も調教を続けました。毎日毎日、牛を洗っては調教に引き運動。段々なついて歩いてくれるようになると、嬉しくなります。

畜産まつりは4年に1度、農業公園で2日間にわたって行われる熊本における畜産の一大イベントです。私たちの学校からは代表の乳牛を1頭、出品してはいたのですが、私の出番はあくまで補佐的なものであり、直接私が先頭に立ってなにかをするという場面はありませんでした。私が行ったのは、汚れないように糞をとる、牛の体調を管理する、など些細なものでしたが、高校の牛だけではなく、同じ地区の乳牛の世話も同時に頑張りました。結局、自分の学校の牛は良い結果をとることはできませんでしたが、私が行った作業を見ていてくださった方々から「牛を世話してくれてありがとう。」と言われたときはすごく感動しました。小さいことだったけれど一つ一つの積み重ねが大事なのだと実感しました。これを機に酪農への興味・感心はより一層強くなりました。

その思いが、将来的に酪農を職業とすると決定づける程に高まったのは、2年生の時のある出来事がきっかけでした。2年生になると、友達と2人だけになりましたが、2年続けて共進会へ参加する準備をしていました。その年、高校では農家さんから子牛を1頭導入しました。学校の牛とは比べ物にならないくらい体高があり驚きました。この牛はみんなから「キーちゃん」と呼ばれるようになり、キーちゃんの調教や世話を導入した日から任されました。

翌年、2月に開催された「熊本中央B&Wショウ」に参加したとき、農家さんから引き方を見てもらい、アドバイスを貰っていました。そのショウでは首席になり、初めて最終審査まで残りました。各部の首席が集まり、その中でグランドチャンピオンを選出します。審査員がグランドチャンピオンを選ぶとき、牛の周りを歩き始めました。すると、優勝の合図であるキーちゃんの尻をたたき、周りから大きな拍手を浴び、私は感動の余り泣きそうになりました。初めて手にしたグランドチャンピオン。この感動は忘れられません。私はキーちゃんとの出会い、自分もこんな牛を育てられたら…と思うようになり、将来自分で牛を飼いたい、酪農をやりたいと思うきっかけになりました。そして、迷わずに熊本農大畜産学科に進学を決めたのです。

2 農業界の問題点・解決策に対する所見

今日、牛乳の消費量の低下による生産量の調整や飼料代の高騰、更に後継者不足等の問題から、酪農家の数はどんどん減少しています。そして追い討ちをかけるようにTPPに関する問題も

出てきています。このような厳しい現状の中、酪農家は生き残りをかけ様々な努力を行っています。

例えば、近年、飲料用の牛乳は消費量の低下にあえいでいますが、食べる牛乳の消費量は増加傾向にあります。食べる牛乳とは、ヨーグルトやチーズ、バター、生クリームなど乳化工品のことです。なぜ、飲料用の牛乳消費量は低下傾向にあるか考えたとき、少子化による学校給食の減少もありますが、清涼飲料水の普及によるものだと私は思います。外出先で喉が渴いたとき、手にするものはお茶やジュースです。牛乳は冷えていなければおいしくありません。牛乳は屋外で飲むより、家でも飲まれるほうが圧倒的に多いと思われます。そこが大きな弱点です。これでは、「完全栄養食品」といわれる牛乳の消費量はどんどん低下していく一方です。

解決策として私は、4つの事を提案します。

第1に、牛乳を使った商品の開発・販売の拡大です。牛乳を二次加工し、チーズや生キャラメルなどへと作り変え付加価値をつけることで食べる牛乳の需要を拡大し、消費量の増大を目指すのです。

第2に、小学生を対象に食育で牛乳の魅力をアピールしたり、酪農教育ファームの体験活動を通して、酪農の大切さや牛乳の価値を理解して貰うことです。そのために、酪農家の方々にも努力して貰い、酪農教育ファームやオープンファームをもっと増やし、消費者を積極的に受け入れ交流することで新しい道を切り開くのです。

第3に、TPPに関する問題も深刻だといえます。最近、よくTPPという言葉を目にするようになりました。TPPとは、環太平洋戦略的経済連携協定の略で、太平洋周辺の国々が自由貿易をしましょうという協定です。自由貿易になれば、参加国同士の輸入する全てのものに関税がかからなくなり、輸入品を安く国内へ持ち込むことが可能となります。輸入品が安く手に入ると、国内生産された農産物を消費する人が減っていくかもしれません。そうなれば、日本の農家などは大打撃を受け、価格では太刀打ちできなくなります。TPPに日本が参加すれば、国内の農家の大半が廃業を余儀なくされることは目に見えています。そして、日本の食料自給率はさらに低下していくことでしょう。私は、国内農業を守るためにTPPには反対します。

第4に、農家さんは、作物を作ったり、家畜を育てたりすることに毎日汗水たらし、愛情を込め、たゆまぬ努力を続けておられます。365日、休みはありません。毎日搾乳し、餌を作り、新しい命に触れ、時には悲しい別れもあります。いかにして安全な農作物が届けられるか、日々苦勞しています。しかし、現実は無駄にしている部分が多すぎるように私は思うのです。ご飯を残したり、賞味期限を切らして破棄したり、作りすぎて破棄したり、食品に対する数多くの無駄が出てきています。農家の方が丹精込めて作ったお米や野菜、畜産物等々。私自身は悔しくてなりません。小学校の頃から「ご飯は残すな」といわれ続けてきました。世界中には、現在も毎年何万人もの人が食べ物がないで飢餓に苦しんでいることを考えると、自分達の食生活を見つめ直すことが大切だと考えます。

これら4つの事を訴えていくために私は、共に農業を学ぶ熊本農大の仲間と協力して活動しています。昨年は、熊本の「学生発・夢挑戦ビジネス大賞」に九州新幹線開通後の修学旅行生誘致をターゲットに酪農教育ファーム体験や地元産農産物を使ったミルクスイーツの商品開発を提案し奨励賞を受賞しました。また、学園祭やいろいろな機会を捉えて消費者ニーズを知るためのアンケートを実施したり、牛乳の魅力をアピールする活動を続けてきました。

3 将来的な自分の展望

私は非農家であるため、将来は新規就農し、牧場を持つことが夢です。大規模に100頭の牛を飼いたいと思っても莫大な投資が必要になるので、耕作放棄地の利用や放牧型の酪農経営を考えています。

そのきっかけになったのは、今年の6月に行ったニュージーランド海外農業研修です。物凄く広大な土地で牛がのびのびと草を食べ、自由に動き回り、ほとんど自然のままの状態で乳牛が飼われているのです。飼料代も、ほとんどかかっていません。濃厚飼料も給与せず、牧草とサイレージでまかなっていました。夏にはトウモロコシを作ります。日本とニュージーランドの違いを見ることができたことは、凄く勉強になったし、放牧型の酪農を体験できたことは、貴重な経験となりました。ニュージーランドの放牧酪農をそのまま日本に持ってくるわけにはいきませんが、後継者不足から問題になっている耕作放棄地を活用し、できるだけ低コストで放牧を行い、自然な飼育方法を見つければ、新しい酪農の可能性が聞けてくると思うのです。

さらに酪農家との交流や情報交換を深めるために共進会等にも参加し、ゆくゆくは自家産の牛を出品していこうと思います。そして、農大で取得した家畜人工授精師を活用し、より良い牛づくりを行います。阿蘇の大自然に囲まれた大地に根を張り、放牧で鍛えた足腰の強い乳牛で連産に耐え、付加価値の高い牛乳を生産していきたいと思っています。

そのためには、あと半年しかありませんが、現在、熊本農大で学んでいることをもっと深めていきたいと思っています。大型特殊けん引免許はもちろん、農業機械応用技術や家畜人工授精師、将来の6次産業化を視野に入れた食品加工等の実習は就農して即活用することができます。講義で学んだ畜産環境問題、畜産衛生、育種、飼料などの基礎知識は酪農に向かう私の足下の土台を固めてくれた気がします。高校とは違って、1人1テーマで取り組んでいるプロジェクト学習は、自ら考え、企画し、実践しなければなりません。「乾乳期のクローズアップ期における飼養管理とTMR飼料設計」が現在取り組んでいる私のテーマですが、毎日乳牛の観察をしながら、きっと今の取り組みが将来の自分の役に立つと思い頑張っています。

4 就農に向けて

高校で牛と出会い、農大で専門的に学び様々な経験と資格取得に励んできましたが、まだまだ

勉強不足だと自分の力の無さを感じています。卒業後は牧場に就農し、酪農家の生活に慣れると共に、技術面を学んでいきたいと考えています。飼養管理や繁殖管理、飼料作物の栽培など、一貫した酪農を現場で吸収し、自分自身を高めていきたいです。

また、働きながらも時間があるときは、他の農家さんの所へ視察に行ったり、共進会へ赴き情報交換を行いながら研修を重ね、将来リース事業を活用し新規就農を目指します。

そして、将来阿蘇の大自然の中で放牧酪農を実践し、自分で育てた牛と共にショウリンクに立つ日を夢見て、私は頑張ります。
